

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 池 俊介 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

1 前 文

本年度の問題数は16問で、食料の生産と消費、地域調査、日本の自然環境と防災、世界の生活文化の大問より構成され、各大問はそれぞれ四つの小問より構成されている。基本的な問題が多い。学習指導要領における内容との関連を見ると、「B国際理解と国際協力」の「(1)生活文化の多様性と国際理解」、(2)地球的課題と国際協力、「C持続可能な地域づくりと私たち」の「(1)自然環境と防災」、「(2)生活圏の調査と地域の展望」から出題され、「A地図や地理情報システムで捉える現代世界」からの出題はなかった。第2問の問1と問2の地図の読み取りがAからの出題と考えることもできるが、これらは、いずれも地域調査での問いである。

大学入試センターでは、事前に問題作成方針に関する三つの基本的な考え方、①「(略)知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う」、②「学習の過程を重視」する、③「多様な入学志願者の学力を適切に評価する」ことが示され、試作問題も公開されている。①については、主題図・地形図10点、写真・画像5点、グラフ5点、表4点を活用して、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う出題がなされている。②については、第2問の問題構成に表れている。③の多様な受験者への配慮は、現在特に強調されているが、本試験では、第2問の問2のメッシュの濃淡が検討されるべきである。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 (『地理総合、地理探究』と共通のため省略。)

第2問 (『地理総合、地理探究』と共通のため省略。)

第3問 日本の自然環境と防災に関する問題。図の読み取りを通じて、地理的技能や思考力を問う問題となっている。試作問題第2問の問3、問4のように、複数の図表・資料から読み取る問題が今回の本試験では見られず、昨年度までの『地理A』での出題傾向と近似している。知識を用いて解く問題が大半で、地理的技能や地理的思考力を問う要素が少ない。全体としてはやや易しめの難易度に設定されている。

問1 日本列島の大地形に関する問題。図の読み取りに加え、直下型地震やプレート境界についての知識があれば容易に解ける問題。「直下型地震も発生しない」、「津波が生じることはない」と断言している選択肢が目立ち、テクニックだけで消去できてしまう可能性が否めず、選択肢の文章の作成に再考を求めたい。

問2 月別降水日数から地点を類推する問題。単純に雨温図を載せるのではなく、月別降水日数から降水量との関連を考えさせるという一工夫が加わっており良問。難易度はやや易しめである。

問3 地形の3D画像と模式図から、土地利用と災害対策について考える問題。前者は地すべり地を判断できれば3D画像から容易に判定でき、後者は模式図の読み取りをしなくても知識だけで解ける問題。大学受験の問題であることを踏まえると、もう少し地理的思考力を問うなどの一工夫が欲しい。やや易しめの問題。

問4 地形図の読み取りから、津波・津波防災について判定する問題。等高線の読み取りから地理的技能を問うているほか、津波に関する知識を用いて解く問題。難易度はやや易しめである。

第4問 世界の生活文化に関する大問である。「生活文化」は「地理総合」の主な学習内容である「国際理解と国際協力」に含まれる。「地理A」では多様性の理解として扱われていたが、「地理総合」では自他の文化を尊重し国際理解を図ることが強調され、持続可能な社会づくりを担う新しい単位として位置付けられている。この大問では、国際交流や情報通信技術といった様々な視点で出題されているが、基本的な知識が問われているものが多く、難易度は標準的と言える。

問1 世界の住居と自然環境に関する問いである。いずれも教科書や資料集でよく見かける高床式の住居と、二つの気候の指標との組合せを選ぶものであるが、緯度が推測できるので、指標のうち、気温の年較差か季節別降水量のどちらか一方を示すだけでも解答は可能である。難易度は低い。

問2 国籍に関する問いである。在日ブラジル人・ベトナム人と両国の在外日本人の居住者数および日本との交流について聞かれている。在留外国人に関する問題は2021年度の『地理A』でも「世界の結び付きと地球的課題」として、在留ブラジル人・ベトナム人の居住者数の推移と都道府県別の居住地割合について出題されているが、今回は両国の交流についての事柄が組み合わされているので、より発展した問題と言える。思考力と判断力が問われ、解答するまでに時間を要する良問と言える。

問3 映画の制作国別作品数の割合に関する問いである。旧宗主国との関係や言語などの文化についての知識が問われている。初見の図ではあるが、基本的な知識で解答可能であり、難易度は高くない。幾つかの国における文化の違いやその背景を考えさせる良問である。

問4 携帯電話契約数の推移に関する問いである。携帯電話の普及について聞いているが、各国の国家規模や経済水準や経済成長等の地域性を考慮する必要がある、解答に時間を要する。共通テストらしい組合せ問題となっており、良問と言える。

3 総評・まとめ

全体的に標準的な問題が多く、複数の資料を参照して解答させる問題も見られる。出題形式としては、地図と説明文を対応させて正誤を判断する問題と、地図・表・グラフと語句との対応を判断する問題が多く見られる。地理では、位置や分布に着目させ、地域的特色や地域の変化、要因や背景を読み取らせるとともに、その地域が抱えている課題や地球的課題、それらへの対応にも着目させるが、位置と分布、その地点や地域的特色を踏まえて解答する問題は、各大問でまんべんなく出題され、地域や地域間の関係性の変化について考えさせる問題も見られる。特に第2問では、複数の資料から考える多面的・多角的な視点を必要とする問題が見られる。

その一方で、地域が抱える課題や地球的課題についての問題について検討すべきであると考えている。他にも「地理探究」の範囲と考えられる問題がないか、大学入試センターにより示されている「学習の過程を重視する問題」、正誤判断の箇所が地理で問われる部分かの検討も必要である。「学習の過程を重視する問題」については、試作問題の第1問で、資料1により各小問を結び付け、探究的なプロセスを経て学習を展開することが示された上で出題されている。また、本試験では、社会や日常の中から課題を発見し解決方法を構想しようとする場面も見られるが、今回の出題内容から判断すると、地球的課題や地域の抱える課題とその対応についての問題をもう少し出題してもよい。大問の中には、資料の読み取りのために地域の特徴を考慮しなければならないものがある一方、わ

ずかな知識のみで地理的技能を活用しないで解答できる問題も見られる。

4 今後の共通テストへの要望

これまでの内容を踏まえ、要望したいことを4点指摘したい。ほとんどは大学入試センターで示されている三つの基本的な考え方に関わることであるが、まず1点目として、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う点について、今後とも様々な資質・能力を総合的に問う出題をお願いしたい。資料を読み取り、地域の特徴や背景を考慮して解答を導き出さなければならない問題がある一方、わずかな知識のみで地理的技能をあまり活用しないで解答できる問題も見られる。提示した資料をすべて扱わなければ解答できないかの確認もお願いしたい。加えて、正誤判断の箇所が地理で問われる部分かの検討も必要である。2点目として、探究のプロセスと、地域が抱える課題や地球的課題とその対応に関する問題数と内容を検討して出題していただきたい。3点目として「地理探究」と「地理総合」の出題範囲を再度確認していただきたい。「地理総合」しか履修していない生徒が、「地理探究」の範囲の内容が出題されて不利になることのないよう配慮していただきたい。4点目として、多様な受験者への配慮のため、地図や図表の見やすさ（メッシュの濃淡など）とわかりやすさを今後とも追求していただきたい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

TEL 03-5802-0201

1 前 文

平均点は『地理総合，地理探究』で 57.48 点，「地理総合」で 43.5 点（100 点満点換算）点であり，単純比較できないものの，昨年度の『地理 B』の 65.74 点とは－8.26 点，『地理 A』の 55.75 点とは－12.25 点と難化した。共通テストへ移行して 5 年目，新課程初年度ということもあって世間の注目度も高い中，高等学校までの学習内容に沿った問いが圧倒的に多く，学習範囲を逸脱した難問や奇問は，本年度も見られなかった。参照すべき資料は多かったものの，試作問題と比べ精選された印象が強い。大きな傾向変化がなかったという点で受験者も安心して取り組めたのではないか。

2 試験問題の程度・設問数・形式等への評価

『地理総合，地理探究』との共通問題は，『地理総合，地理探究』の方に記載。2022 年に公表された試作問題における大問構成と内容は，第 1 問「地球的課題（難民）」，第 2 問「自然環境と防災」，第 3 問「生活文化」，第 4 問「地域調査」で，本試験では第 1 問「地球的課題（食料問題）」，第 2 問「地域調査（愛知県東三河地域）」，第 3 問「自然環境と防災」，第 4 問「生活文化」となり，『地理総合，地理探究』との共通大問に充てられた分野は異なっているが，「地理総合」全体の大問構成としては，試作問題と同様であった。

新課程においても，基礎的な知識・理解をもとに思考・判断する学習の過程を意識した問いが多く，各小問に図や表，写真などを含めた豊富な資料が提示され，それらの資料が提示されず設問文だけが提示された問いは 16 問の中には見られなかった。また，組合せ選択の小問が 16 問中 8 問で，昨年度までの『地理 A』や『地理 B』よりも割合は減少した。その分，正誤判定の問いが 16 問中 6 問あり，組合せ選択でも正誤判定でもない問いは 2 問であった。時間を要する組合せ選択の問いが減少したことは評価したい。

第 3 問 「日本の自然環境と防災」 日本の自然環境の特徴や，もたらされる災害，それに対する対策について問う大問。問 3 において地すべり地形の棚田としての利用が取り上げられるなど，自然環境の災害としての現れ方だけでなく，恩恵や利用の仕方についても取り上げていた点は好印象だった。

問 1 日本列島付近のプレート境界とそれに伴う地震や火山活動に関する文章選択問題で，易問。

問 2 3 都市の気候に関する組合せ選択の問い。月別降水日数で示すのは受験者には目新しかったかもしれないが，日本海側と太平洋側，南西諸島という特徴ある気候帯からの出題だった。

問 3 二つの空欄に当てはまる語句の組合せ選択の問い。資料の読み取りから正解を得られ，この問いも難易度的には易。地すべり地における棚田の利用は，災害に目が向けられがちな中で自然の恵みについて扱っており，評価できる。

問 4 4 地点の地形的特徴と図から丁寧に読み取り，防災について考察する文選。シンプルな作りであるが，読図の力を測る適切な難易度の問い。

第 4 問 「世界の生活文化」 生活文化についての大問で，自然環境との関わりだけではな

く歴史的背景や産業などの社会環境と関わった生活文化についても問われた。一方で、宗教に関する問いや、国の中での文化的多様性に関する問いは見られなかった。様々なテーマが考えられる大問であるため、バランスの良い出題を期待したい。

問1 写真で示された3地点の高床住居と、3地点の気温の年較差並びに1月、7月の降水量が示されたグラフとの組合せ選択の問い。高床住居は教科書・資料集でも取り上げられる代表的なものだが、グラフの読み取りは「地理総合」としては難易度がやや高い。

問2 日本とブラジル、ベトナムとの人の移動に関する問いで、力とキで説明されていることと数的な変化を結び付けられれば正解できたか。資料1は、ブラジルでの日本人居住者の減少や、日本でのブラジル人居住者の減少についての要因を考察させることなどに活用できるか。

問3 映画の国境を越えた流通に関する問い。アメリカ合衆国の隣国メキシコの公用語がスペイン語であることを理解していれば、容易に正解を得られた。セネガルがフランス領であることについても判断させており、一定の知識の習得が必要であることを示した問いとなっている。

問4 携帯電話契約数の人口が20%から100%に至るまでの年数についての問いで、難易度は標準的。固定電話が既に普及していた国や、国民の数が多い国で携帯電話の普及に年数がかかると判断できたか。問題文と資料がコンパクトであるが、国同士の違いもよく読み取れ、日本を参考にしながら考察できた点も、共通テストらしい仕上がり。

3 総評・まとめ・要望

新課程初年度ということで注目が集まる中、試作問題から更に資料数や問い方が精選された形での本試験であった。一方で、昨年度と比べて平均点の低下が物語っているように、手ごたえに対して得点が伴わなかった受験者がいたのではないかと推測する。『地理総合、地理探究』においては、少なくとも昨年度旧課程『地理B』並み、「地理総合」についても昨年度『地理A』並みの点数が得られるよう、調整をお願いしたい。

完全解答が求められる6択問題では、一つは正解できても、残りの二つを逆に捉えてしまったがために不正解となるため、正答率の低かった問いを分析し、思考判断の手掛かりを加えるなどの工夫をお願いしたい。資料数や問い方が精選されたことで、いたずらに解答時間がかかる問いは見られなかったが、受験者にとって初見となるような資料や用語については、それそのものの理解に時間を要しなくても良いような改善を願う。

提示された資料の中には、そのまま授業でも用いられるような、様々な展開の仕方が考えられる示唆的なものも見られた。今後も地球上の様々な事象に対して、地理的見方・考え方を養い、事象の意味や将来像を自然と想起してしまうような、現場の教員の手本となる作問を求めたい。